

女子短大生の卒業後 10年間に於けるアイデンティティ発達に関する研究

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域

近年、高学歴化による就職の延期や晩婚化などの影響により、青年期の延長、青年期と成人期の間に空白の期間の存在や、大人になりきれない若者の存在が社会的に関心を集めている。こうした現象の背景には高度経済成長の時代から高度情報化社会へ時代が移り変わるとともに個人の生き方の選択肢が多様化し、「自分らしさ」や「自己実現」といった「自分にとってのイメージ」が重要視されるようになったということが密接に関係するということ（荒木，2003）。従来青年期における「どう生きるか」という問題を取り扱う上で、Erickson(1959)の提唱した「アイデンティティ」という概念は非常に有効であると考えられてきた。

しかし、近年のアイデンティティ研究では、Ericksonの理論では不十分であった文化差や性差の探索（Marcia，1966）、あるいはそれらの差を統合したモデルの構築（Marcia, Waterman, Matterson, Arher & Orlofsky, 1993）が課題とされている。性差の問題においては、男女間のプロフィールの相違（Cramer, 2000）や女性の発達モデルが男性に比べて複雑で変化が多いこと（Meeus, Iedama, Helsen & Vollrbergh, 1999）が発見されている。さらに、女性の発達を自立や分離-個体化といった個の発達のみでなく関係性の視点からも捉える見方が注目されている（杉村，1998；岡本，2002）。そもそもEricksonを始めとする主要な発達モデルは欧米の男性を対象に作られたものであり、個人の発達を重視する社会においてのモデルであった。日本でも近代化にともない、女子に対しても学校教育では、個の能力の開発や個としての自立を奨励されている。しかしながら、学校教育を終え、就職、結婚といった自分の将来を決定するうえで重要な選択をする段階になると、性差や性役割を意識させられ、それを受容したうえで自己実現を望むことが求められる。結果的に女性は、主体的な選択が出来ず、そのため選択後に自分の理想と現実の自分に対する評価に葛藤を感じ、社会や重要な他者から望まれる生き方に回帰することで心理的安定を保つか、あくまで自分の生き方を模索し続けるかの間で揺れを経験する。しかしながら、ある程度精神的健康度の高い人であれば、ある段階に達すると自分の理想と現実に折り合いをつけ、限られた選択肢の中で、将来的展望を見据えた選択を主体的にするすべを学ぶのではないだろうか。

本研究では、アイデンティティの揺れを経験する時期を社会に出てその後であると仮定し、葛藤を経験しながらも折り合いをつける時期を10年以内と仮定し、大学生とは異なる心理的特徴を持つといわれながら、研究がされていない短大生の卒業後10年間のアイデンティティ形成過程を明らかにすることを目的とした。また、質問紙や構造化されたインタビューでは見えにくい、個人の発達プロセスを明らかにすることであるため、少数の協力

者に数回に及ぶインタビューを実施する方法を取った。インタビュー方法は、自分の友人に対して語り合いという手法で青年期のアイデンティティの揺らぎを研究した大倉(2002a, 2002b)の手法を参考にした。本研究の協力者は5名で、A短期卒業後10年目の同期生である。インタビューは、約1年間かけて、1人に付き2~3回行い、合計時間は3~5時間であった。インタビューでは、初回派、研究者側から時間の設定はせずに、主に短大卒業後から現在までのライフイベントや自分の変化、転機の経験等について聞き取りを行った。2,3回目での面接では、前回のインタビューの確認と、捕捉説明を中心に行った。さらに、最終回では、自発的なエピソードの少なかった協力者に対して、他の協力者に共通して語られたイベントについての気持ちや、エピソードを聞いた。

結果の分析は、全てのインタビューの逐語録を起し、その中から同じ文脈のものを集めて、時系列に並べ、共通した文脈の抽出を行った。その結果、協力者の女性達に短大当時の将来展望、短大での就職活動のし方、社会に出てからのギャップの感じ方などに、共通点が浮かび上がった。その結果、5名の女性は短大卒業時の20歳の時点では、かなり類似した将来イメージを持っていたが、その後の経験や模索の中で5名の女性は、それぞれ自分なりに自分の方向性を模索していくことが分かった。さらに、5名の女性の20代の10年間の変化のプロセスとして、「理想と現実の折り合いのつけ方」に共通した「五段階」があることが考察された。そこで、個別の事例を、「五段階」を使って、考察を行いモデルの有効性を確認した。

今後の研究で本研究で提唱した「理想と現実の折り合いのつけ方の五段階」の有効性を、協力者の数を増やして確認するとともに、そのモデルが、短大卒の女性独自のものか、女性一般に当てはまるものかを確認することが望まれる。